

三番瀬再生の段階的目標，達成度合，行動と役割分担など

前振り

- ・「自然環境調査」：定常状態の把握を急ぐ。
- ・段階的具体的な目標設定：目標の設定がないと何を試験するのかよくわからない。

再生基本計画で合意した目標は長期目標としてはいいが荒削り。段階的計画がいずれも抽象的。具体的な提案がほしい。「現状を保全して公園化」「部分再生：いくつかの段階」「完全再生」など、目標によって段階毎に選択肢があり、それぞれに実現化のための方策やタスクフォースが必要になる。

1. 三番瀬再生の段階的目標設定と「生態系ユニット」

現在、三番瀬再生のための「目標生物」の候補を三番瀬目標生物勉強会と三番瀬市民会議が調査中。私の理解：目標生物とは、その生物が戻ってくることを目標にすることによって、その生物が棲める環境の再生が達成されたことを示す、環境尺度である。

ある生物群はある生態系のユニットのもつ景観や機能を象徴する。ある生物個体群が生息するには、生活史や工サ環境、縄張りを含めた生息空間の規模がわかる。従って、「目標生物」を組み込んだ「生態系のユニット」をいくつ再生できるか、あるいは「ユニット環ネットワーク」がどのくらい回復できるかを、環境再生の段階的目標とその達成度の目安にしてはどうか。

2. 再生への行動

2-1) 目標生物勉強会と評価委員会「生態系ユニットの具体化」

目標生物勉強会では、現在、目標生物に関するアンケートで、生物の目撃情報を地図に落とし込む作業を実施中。アンケートでは年代ごとの地図に生物の観察状況を記述しているので、どこが開発された時にどの生態系ユニットがいつ最終的なダメージを受けたかがわかるかもしれない。地元に残っている記憶を遺産に、目標を決定し具体化することが出来そうである。それら基に、勉強会と評価委員会のジョイントワークショップを行い、目標生物と生態系ユニットの再生の方向性を確認し(ユニットの設計がおかしくないかチェックして)、段階毎のゴールを共有する。

2-2) 三番瀬，行徳湿地，江戸川放水路，谷津干潟の地域間ネットワークを強化する事業

水中を魚介類等ベントス幼生が行き来して、分布拡大が可能になるようなネットワークを強化する事業を考える。各種ベントス個体群のバックアップが地域間で相互補助になる体制をつくっておく。

2-3) 県として

A) 国交省への働きかけ：清野シミュレーションの検証

国土交通省は東京湾にある深掘りを埋め戻す事業を行っている。そこで浦安沖の深掘り跡を優先的に埋めるよう働きかける。このことで旧江戸川からの流砂の流れが回復するかどうか、を検証する。東京湾再生推進会議のメンバーの一員として、千葉県から国交省に積極的に働きかける。

B) 再生事業の加速：2010年生物多様性条約 COP10 名古屋で千葉県の声を発信

三番瀬再生計画の具体案を示し、千葉県が主導で2010年の生物多様性条約第10回締結会議の際に名古屋で、干潟再生に取り組む地方自治体を中心としたサテライトシンポジウムを開催してはどうか。

3. 目標生物選定に関する勉強会へのコメント

3-1) 後背湿地の生物に関しては、維管束植物ハママツナ、ナガミノオニシバ、シオクグ、昆虫のヒヌマイトトンボやギョウトクコミズギワゴミムシ等を加えることが望ましい。

3-2) 再生の最終形かもしれないが(長期目標?)、海と陸の連続性の回復を考え、ウナギ、モクズガニを入れることが望ましい。

3-3) トータルで生態系を表現できる「生物指標群」を組むことが望ましい。

3-4) 広い分類群にまたがる生物学者から情報を集めること、生態系ユニット毎に、どんな生物が三番瀬あるいは東京湾であり得るかを、千葉県中央博物館等で聞き込み、精度を高めることが望ましい。

3-5) 江戸川放水路を開けてしまうと、出水のためにオキシジミやソトオリガイなどの東京湾では珍しくなってしまった「東京湾の遺伝子個体群」が影響を受けるおそれがあるので、今のように少量の水が流れて汽水域を作っている状況を保全する。まっすぐの河道を大量の水が走り、流された生物は航路に落ちて死亡する。これが度重なると耐えられなくなった個体群から順に消えていくという取り返しのつかないダメージを与える可能性が高い。三番瀬は河口干潟ではなく、旧江戸川から流れてくる土砂で成り立っている前浜干潟なので、注意が必要。こうした点もふまえて上記4-1のワークショップで詰めていってはどうか。2-2で提案したネットワークは、これらの個体群を救うために必要と思われる。

4. 市川塩浜駅前の6ヘクタール：実践的な再生事業の実施

市川塩浜駅前は「海の再生を前提」として市川市が海辺の街にふさわしく再整備するための用地として、旧国鉄の土地を買取っている。東京湾の原風景を駅前に再現し保全するなど、アイデアをだして2-3Bのシンポジウムで示してはどうか。

実証実験がいろいろ必要なことはわかるが、できることは実行してそれをモニターするような実践で学びつつ再生する方が手っ取り早いように思う。そういう意味では、市川市所有地はモデルになるし、その周囲の保全地とのネットワークに役立つような設計にすることで、本務にたった実験ができる。